

2012年度日本カレドニア学会公開講座

日本とスコットランド

講座の概要と講師紹介

日本カレドニア学会は、スコットランド文化の啓発をその活動の一つとして掲げており、この考えのもと、2006年より公開講座をはじめました。これまでに音楽、食文化、思想的・文化的風土、ロバート・バーズなどをテーマとして取上げ、聴講者から高い評価をいただきました。昨年度と一昨年度は2年連続企画として「スコットランドの歩き方」をテーマにし、様々な土地を文学、歴史、民俗、文化などの観点からさらに深く紹介しました。

本年度は「日本とスコットランド」をテーマに、明治維新時の日本近代化に深くかかわったスコットランド人やスコットランド文学から影響を受けた日本人作家を紹介し、また地方自治活動やスコットランド文学の翻訳にみる現代スコットランド事情、さらにはスコットランド版忠犬ハチ公ともいえるグレイフライアーズ・ポビーの真実の姿、雑誌編集を通してのスコットランドのもつ様々な顔を専門の講師がお話いたします。日本や日本人がいかにスコットランドと深いかかわりをもっているかがおわかりいただけますとともに、スコットランドがさらに身近に感じられることと思われま

日程

第1回6月2日（土）

1. 13:30-14:50 講師 稲永丈夫（NPO日本スコットランド協会）

「日本近代化に参画したスコッツ父祖列伝」

2. 15:10-16:30 講師 樋口陽子（元鹿児島国際大学）

「グレイフライアーズ・ポビーと日本」

第2回6月9日（土）

1. 13:30-14:50 講師 坂本恵（福島大学）

「スコットランド自治拡大の現状と日本の地方自治の課題」

2. 15:10-16:30 講師 三村美智子（NPO日本スコットランド協会）

「スコットランドと日本の関係から学ぶ—『蘇格蘭通信』の編集を通して」

第3回6月16日（土）

1. 13:30-14:50 講師 有元志保（東洋大学）

「フィオナ・マクラウドの日本受容—野口米次郎、松村みね子、尾崎翠」

2. 15:10-16:30 講師 松井優子（青山学院大学）

「現代スコットランド小説翻訳事情—日本語で出会う物語」

* * * どなたでも聴講できます。お気軽にご参加下さい。 * * *

会場

拓殖大学・文京キャンパス C館305（6月2日・16日）、C館304（6月9日）
文京区小日向3-4-14（東京メトロ丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩3分）



参加費

各回500円（資料代）

内容と講師紹介

稲永 丈夫(いななが ますを)

日本近代化に参画したスコッツ父祖列伝

周知の通り、日本の近代の夜明けを告げる明治維新は、単なる王政復古ではなく、700年も続いた武士支配の封建制と決別する革命であった。しかし、革命の前進に大きく立ちほだかったのは、幕府が残した屈辱的な治外法権を盛った江戸条約であった。治外法権を認める近代国家などあり得ない。唯、日本には当時近代国家に相応しい体制自体が皆無であり、「国造り」こそ正に焦眉の急であった。その捷徑として採用されたのが、先進西洋諸国の人材を重用することだった。中でも、産業革命を世界に先駆けて達成し、「世界の工場」と言われたスコットランドは、国造りに最も必要な技術、産業、知識、人材の格好の供給源となった。結果、日本の近代化に参画した数多くのスコッツは、広範な分野で「父祖」となり、今日も崇敬を集めている。

プロフィール

1936年、鹿児島島の指宿に生れるも主に大阪育ち。1958年、大阪外大(現大阪大学外国学部)を卒業し住友商事入社。主に鉄鋼輸出畑を歩み、メキシコ・シティ、リオデジャネイロ、ロンドン各地に通算20年駐在、最後にジェトロのシニア・アドバイザーとして、2年間グラスゴウに滞在しスコットランド企業の対日輸出を支援指導した。帰国後はジェトロの輸入促進アドバイザー及びスコットランド通商代表部日本代表を各々3年勤めた後、貿易コンサルとして独立。趣味はゴルフとスコットランドの研究(主に日ス交流史)。NPO日本スコットランド協会、カレドニア学会、スコットランド・グローバル・ネットワークに所属。

樋口 陽子(ひぐち あきこ)

グレイフライアーズ・ポビーと日本

エディンバラ市旧市街の大通りに、小さな犬の彫像がちょこんと台座に乗っている。この犬は、初めは「ポビー」とだけ呼ばれていた。早世した飼い主がグレイフライアーズ教会墓地に埋葬されてから、彼を慕ったポビーが悪天候以外は毎夜お墓で過ごすようになったので、「グレイフライアーズ・ポビー」と呼ばれるようになり、見守りは14年間続いた。私が初めてこの犬の像と伝記に出会ったのは、1983年夏である。この年の後期に、勤務校の中学2年生と、英語副読本『心暖まる物語』(開隆堂)でポビーについて読んだ。1997年にも読み、すっかり忘れていた2007年秋には、鹿児島の高校の先生がこの本をテキストにした授業報告をなされた。2009年8月には、初めてグレイフライアーズ教会墓地を訪れ、児童用絵本と伝記(改訂版)も求めた。この絵本や伝記のポビーの実像は、上記の英語副読本のポビーの姿とはいくつかの点で異なっている。

昨年解説を付けて児童用絵本『グレイフライアーズ・ポビー:心あたたまる名犬の物語』(あるば書房)を拙訳出版したのは、ポビーの本当の姿を日本の生徒や読者に知って頂きたいからであった。上記の中学生用英語副教材のみならず、日本で発行された犬に関する書物でも、ポビーは誤って記されている。なぜだろうか?今回の講座では、その理由を推論する。

プロフィール

元鹿児島国際大学国際文化学部、同大学院国際文化研究科教授。文学博士。1988-89年、安倍能成記念長期海外研修基金によりケムブリッジ大学英文科訪問研究員。著書: *The Brontës and Music*, 2 vols., CD付き(雄松堂出版、2008年、鹿児島国際大学より出版助成)。翻訳書:デイヴィッド・ロス著『グレイフライアーズ・ポビー』(あるば書房、2011年)。マリアン・エヴァンズ著、樋口陽子・樋口恒晴共訳『エドワード・ネヴィル』(彩流社、2011年)。専門分野:ブロンテと音楽、19世紀と20世紀の英国小説など。

坂本 恵(さかもと めぐみ)

スコットランド自治拡大の現状と、日本の地方自治の課題

1707年にスコットランドがイングランド王国によって併合されて以来、300年以上この地域は独自の行政権を持つことがなく、ロンドンのウェストミンスターに統治されてきた。1999年「スコットランド議会」が設置され、地方分権の動きは急速に高まったが、その背景には、第一次世界大戦期にみられた、地域言語「スコツ語」や、スコットランド文学、この地域の独自の歴史への関心の高まりや、1970年代に発見された北海油田をめぐる、経済的独立の機運の強まりなどをあげることができる。2011年のスコットランド総選挙で、英国からの独立を掲げる「スコットランド国民党」が、全129議席中69議席を得て、はじめて単独過半数となったことで、今後さらに大きな変化をもたらすことが予想される。この国民党の躍進の原因は何なのか。また、スコットランドの英国との関係は今後どのように変わっていくのか。

日本でも「地方分権」をめぐる議論が盛んになり、最近では名古屋、大阪の首長による地域主権構想が衆目をあつめている。しかし、もともと「地方自治」を求める議論は、日本近代史のなかで、自由民権運動の重要な論点の一つであったことを、あらためて思い浮かべる必要があるだろう。

う。講座ではスコットランドと日本の地方自治を求める運動を比較して、何が浮かび上がってくるのかを参加者と共に考えてみたいと思っている。

プロフィール

福島大学教授。立命館大学文学部卒業。中央大学大学院文学研究科英米文学科博士後期課程満期退学。2003-04年、スコットランドアバディーン大学客員教授。専門は20世紀スコットランド小説。共著：『ジェンダーと歴史の境界を読む「チャタレー夫人の恋人」考』（国土社、1999年）。『スコットランド文化事典』（原書房、2006年）。『スコットランド文学 その流れと本質』（開文社出版、2011年）。『英米文学を読み継ぐ～歴史・階級・ジェンダー・エスニシティの視点から』（開文社出版、2012年）など。

三村 美智子(みむら みちこ)

スコットランドと日本の関係から学ぶ—『蘇格蘭通信』の編集を通して

スコットランドに関わりその魅力にとらわれて、イングランドを素通りし彼の地を訪ねるようになったのは、日本スコットランド協会(JSS)の創立以来その活動にのめりこんだからと言える。それは1985年から始まった。私のスコットランドへの知識は、協会の歩みとともに育ってきた。初めの10年ほどはスコットランドと日本の関係を、日本の人たちにより知ってもらうために『蘇格蘭通信』という雑誌を12冊編集してオールドパー・ジャパンが出版、会員や全国各地の図書館、大学の図書館や英文学部などにJSSが配布していた。外国に住む日本の人たちにも送ってきている。スコットランドの地域や歴史や文化の紹介、日本との関係、あちらで出会ったスコットランド人たち、日本の読者が楽しんで読むような内容だ。スコットランドの人に原稿を依頼もした。この講座では、私はスコットランドとどのようにかわり、スコットランドを知っていったかを語りたいと思う。

プロフィール

NPO日本スコットランド協会のスタッフ・理事を務めて現在に至る。河出書房新社の編集部時代から翻訳と児童文学の評論を書いてきた。絵本、詩、文学関係の翻訳をする。ノンセンス文学、とくにナースリータイム、エドワード・リア、ルイス・キャロル、A.A.ミルンに関心を持つ。昨年まで明星大学で非常勤講師を務め、翻訳家としてフェロー・アカデミーの講師の仕事は10年を超えた。著書：『蘇格蘭』（大沢商会、1990年）。共著：『図説スコットランド』（河出書房新社、2005年）。『スコットランド文化事典』（原書房、2006年）、翻訳書：メアリー・M・ロジャース著『スコットランド』（国土社、1997年）。トム・ミュア著、東浦義雄・三村美智子共訳『人魚と結婚した男』（あるば書房、2004年）など。

有元 志保(ありもと しほ)

フィオナ・マクラウドの日本受容—野口米次郎、松村みね子、尾崎翠

フィオナ・マクラウドはスコットランド生まれの作家ウィリアム・シャープ(1855-1905)の異名である。シャープはマクラウドの名で多数の創作や随想を著した。今日ではマクラウドの作品が広く読まれているとはいえないが、19世紀末から20世紀初頭にかけてマクラウドはアイルランド、スコット

ランドを中心に隆盛していた「ケルトの薄明」とも呼ばれるケルト文芸復興の担い手の一人としてW. B. イェイツらと並び名を知られた存在であった。そして明治から昭和初期の日本人の中にもマクラウドと「彼女」の作品に注目した人々がいた。今回はその中でもシャープ存命中にイギリスに滞在してマクラウドと文通も行った野口米次郎(1875-1947)を中心に、マクラウドの短編を翻訳した松村みね子(1878-1957)、シャープ／マクラウドの両性具有的な性質への関心を作品に反映した尾崎翠(1896-1971)を取り上げてマクラウドとの関わりを探りたい。

プロフィール

東洋大学非常勤講師。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学後、博士号(人間・環境学)取得。専門は19世紀イギリス文学。著書:『男と女を生きた作家:ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品と生涯』(国書刊行会、2012年)。論文:「ウィリアム・シャープによる『フィオナ・マクラウド』のペルソナ構築」(『スコットランドの歴史と文化』、明石書店、2008年)など。

松井 優子(まつい ゆうこ)

現代スコットランド小説翻訳事情—日本語で出会う物語

翻訳、つまり日本語で出会えるスコットランドの現代小説にはどのような作家や作品があり、また、そこにはどのような傾向や問題点が考えられるだろうか。スコットランドの作家と言えば、19世紀の末にかけて活躍した「シャーロック・ホームズ」シリーズのA. C. Doyleや『ジキル博士とハイド氏の怪事件』のR. L. Stevensonらがよく知られている。一方、現代スコットランドでは、Alasdair Gray (1934-) やIan Rankin (1960-)、Irvine Welsh (1958-) やAli Smith (1962-) といった、きわめて多彩な作家たちが世界的にも名を馳せ、その代表的作品の多くは日本語にも訳されている。彼らの作品は、一面ではDoyleやStevenson、あるいはそれ以前のWalter Scott (1771-1832)やJames Hogg (1770-1835)らの伝統をふまえつつ、さまざまに語りを工夫しながら、現代スコットランドや連合王国の状況を映し出している。今回は、彼らの翻訳作品からできる限り多く引用しながら、その語りや言葉づかいをふくめ、日本語で出会うスコットランドの特徴について検討し、現代スコットランド小説の翻訳事情について考えてみたい。

プロフィール

青山学院大学教授。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得満期退学。19世紀英文学、特にウォルター・スコットをはじめとするロマン主義時代の小説を研究。著書:『スコット—人と文学』(勉誠出版、2007年)。共著:『図説スコットランド』(河出書房新社、2005年)。『スコットランド文化事典』(原書房、2006年)。論文:「エディンバラと犯罪小説(1)、(2)」(『駿河台大学論叢』、2000、2001年)など。